

乳幼児期における言語表現の発達

吉田 裕久 (安田女子大学)

人は、認識・思考・伝達的手段である言葉をどのように習得していくのか。これまでも、乳幼児の発話を採集して報告された事例・研究は多く存在する。ここに取り上げるのは、その一環(一例)である。人が、生まれてから、言葉(日本語)らしきものを発するようになる(泣く→声を上げる(音声を発する)→言葉をつぶやく)までの1年半の発声・発話の一実態である。言葉を持たない存在から、言葉に触れ、言葉を理解し、言葉をまね、言葉を表現する—言葉の使い手として成長していく、言葉習得の初期過程のドキュメントである。すなわち、「クーイング→喃語→ジャーゴン→初語→一語文→二語文→語彙爆発」に至る過程の一事例である。キーワード：乳幼児期、幼児言語、言語表現、初語、一語文

I 研究の目的と方法

1. 研究の動機・目的

人は、認識・思考・伝達的手段である言葉をどのように習得していくのか。これまでも、乳幼児の発話を採集して報告された事例・研究は多く存在する。その代表的な先行研究として、大久保愛(1967, 対象：女児, 採集時期：1958年), 野地潤家(1973, 対象：男児, 採集時期：1948年), 藤原与一(1977, 対象：男・女児4名, 採集時期：昭和10年代)などがある。いずれも身内を対象とした、語学的アプローチになるものである。

筆者も、こうした先行研究に導かれて、「乳幼児の言葉の発達はどのように行われているのか。わが子の場合でそれを確認したい」という関心を持つようになり、細々ながらこの興味深い作業に従った。ここに報告するのは、筆者の次女(以下、K)が生まれてから、言葉(日本語)らしきものを発するようになる(泣く→音声を発する→言葉をつぶやく)までの1年半の発声・発話の実態である。言葉を持たない存在から、言葉に触れ、言葉を理解し、言葉をまね、言葉を表現する、言葉の使い手として成長していく、その初期過程の実態である。

ただ、子どもは、一人一人が違う。一人一人、その子の特色がある。言葉の習得・発達も、もとより「個人的」なものである。その意味では、「この子の場合」という限定付きであり、あくまで一事例に他ならない。しかし、そのためにも、一人一人の事例を多く提示する必要がある。ここに、一事例を取り上げる所以である。

2. 研究対象、及び時期

対象児Kは、1981年9月生まれ。家族構成は、父(筆者, 32歳), 母(26歳), 姉(本稿ではF, 2歳, 1979年7月生)。生活の場は、広島市である。時期的には、Kの誕生から、1歳半になる1983年2月までを対象とする。この時期は、一般的に、「クーイング」(生後8週目頃), 「喃語」(4か月頃), 「重複喃語」(6か月頃), 「ジャーゴン」(8か月頃), 「初語」(12か月頃), 「一語文」(1歳初期), 「二語文」(1歳3か月～6か月頃), 「語彙爆発」(1歳6か月頃～10か月頃)に当たる(赤羽根有里子他編『保育内容ことば』, 2018.3, みらい, p.39)とされている。

3. 研究仮説

対象児Kの場合も、時代を超え、地域を超えた、この一般的な言語表現の実態及び発達過程を採るであろうとともに、この対象児に固有の面も見られるのではないかと(一般性と固有性)。

4. 採集の対象と記録の方法

(1) 採集の対象

その採集の対象は、「あっ、こんな言葉を話している、使い始めた」「こんな言葉が分かっている、理解している」などと気づいたり、驚いたりした発音・語彙・文法(表現法)が中心になっている。しかし、四六時中カードと鉛筆を持ち歩いたわけではないので(努力はしたが)、全発話を記録できたわけではない。その意味で言えば、ここに記した事例が必ずしも「初出」とは限らない。少なくとも、この時点でこういう「発話」をし

ているというのが実状である。多くの場合、言葉で顕著な例を認めた時に、カードに書き留めたものである。

また、この乳幼児という時期は、言葉とともに身振り・行動（座る、這う、立つ、走る、跳ぶなど）も「表現」として大事である。言葉を中心に採集しながら、特徴的な「できるようになった」行動も合わせ記すようにした。その意味では、広く「言語生活」の記録と言って良い。

さらに対話場面では、対話の相手の発話も記すようにした。周りからの刺激を受けてそれを模倣し（とりわけマザリーズ）自分でも発してみる、そうした傾向が多く認められるからである。

（２）記録の方法

父と母とで協力して採集・記録した。記録媒体は、カード（B5用紙を横に4つ折り、幅6.4cm×長さ18.2cm）を利用した。手のひらに収まり記述に便利、持ち運びも胸ポケット等に入る手頃な大きさである。保存にも、長形4号封筒（9.0cm×20.5cm）にちょうど収まる。基本的に、1か月単位で収納した。

文本位、対話重視で記述する。アクセント（高低、本稿では高い部分を太字で示す）を付す。使用場面・状況（現場）をできるだけ具体的に記す。発話は片仮名で表記するので、実際の音声そのままではない。

Ⅱ 発声・発話の実態

1981.9.20の誕生から1年半の間、K児の発声・発話を中心に、行動・様子、気づき等も含めて記述する。

◇2か月

・1981.10.30（生後41日目） 「ンー」、軽く尻上がり調。独り言。口から発せられた音（声）。いわゆる「クーイング」（気分の良いときに発する「アー」「ウー」）か。現実には、これより前から発していたように思う。

◇3か月

・1981.12.1 相変わらず、「アー」、「ンー」と声を上げ、よく喃語を発する。いつまでも言い続ける。

◇5か月

・1982.2.8 「アプー」を始める。唇を震わせる。独り言。一人遊び。

◇6か月

・3.7 寝返りをする。「バツ」、「バー」など、相変わらず大きな声を張り上げている。子音と母音とが組み合わせあった、いわゆる「喃語」の延長かと思われる。

◇7か月

・4.22 Kは朝一番の早起き。夜は7時過ぎに寝て、朝は6時半頃には目覚める。一人で「バー バー」などと、大声を上げてはしゃぐ 「ンバー、ンバー、ウンバー」とも。同じ音を繰り返す「重複喃語」か？一人座りが様になってきた。姉のFが近くにいると、一番嬉しいようである。

◇8か月

・5.20 Kは、Fの存在を最も喜ぶ。風呂でも、Fが一緒だとキャアキャアはしゃぐ。Fがそばにいれば、その横で自分のおもちゃで遊ぶ。Fが「バー」と呼びかけると、必ず笑顔で応えている。Kにとって、心的距離は、母・F→父となっている。

・5.21 寝返りが自由にできて、あっちへごろり、こっちへごろり。4畳半を自在に這い回るようになった。お菓子を差し出すと、手を出して受け取り、自ら口へ持って行く。

・5.24 母→K「カヨコ、オイデ、オイデ」と両手を差し出すと、Kは両手を水平に挙げて抱っこしやすいようにする。

・5.30 一番の早起きは変わらない。6時前後には目を覚まし、奇声（言葉、聞き取れない）を発して家中の者を起こす。午前1時間、午後2時間の睡眠が取れば機嫌が良い。後ずさりができるようになった。

・5.31 座ったままで、向きを変え、幾分か移動することができる

◇9か月

・6.21 這い始め。前へちゃんと這い始めた。ゆっくり。距離も2～3メートル。母のいる所まで、両手両膝を

使って這う。仰向けの状態からひっくり返り、そのまま後ずさり、座ることができるようになった。

- ・6.25 大声で、「〇〇」（2音節、尻上がり調）で呼びかける。「(オ)トーサン、(オ)カーサン」とも聞こえる。敷居（レール）の所を這うときは痛いものだから、足を伸ばし、腰を高くしてまたぐようにする。這い始めの2日くらいは泣きながらそこを乗り越えたり、レールの上に座り込んだりしていたが、少々知恵づいたか、片足ずつまたぐようにしている。痛さから学んだか。
- ・6.28 「カヨチャン」と呼びかけると、「アー」、「ウー」と声を上げて返事している。声かけに対する単純な反応だと思うが、面白い。
- ・6.30 Fが遊んでいるおもちゃをKがつかもうとする。Fが「ダメ」と言って貸してくれない。Fが出っぱなしで外出した際、こことばかり一人でじっくり楽しんでいる。早くもおもちゃを巡って、姉妹間で争いを起こしている。Kも負けていないで、Fにつかみかかることもある。

発している音声のイントネーション・リズムから、「ウマ、ウマ」「オカーサン」、「オトーサン」と言っているように聞こえる。聞きなしだろうと思うが、こうしてみると、乳幼児の言葉習得は、言葉（語）を学ぶというよりも、まずはイントネーション・リズムを習得しているように思われる。そして、イントネーションやリズムが母語そっくりになるという「ジャーゴン (jargon)」の現象のようにも思われる

- 「カヨチャン、オイデ」は、分かるようになったらしい。「オイデ」と言うと、向こうに行きかけても振り返り、こちらにやってくる。父や母が「バイバイ」と手を振ると、真似して、頭の横の方に手を差し上げて振る。
- ・7.17 父がスモモを一切れ、Kの口に入れてやる。父→K「マンマ ダヨ」と声をかけると、Kは「マンマ」と明瞭に発音できている。Kの初語として認定して良いか？
 - ・同 父母→K「カヨチャン」 K「ンー」（mまたはn音） 自分の名前が分かっているのだろう。これまで行動で示すことはあった（やってくる、振り返る）が、明らかに言葉で反応（返事）をしている。

◇10か月

- ・7.22 K「ブー」。両唇を強く合わせて音を出す。KとFとで、「ブー ブー」を繰り返して遊んでいる。音が出ることを喜び、楽しんでいる。
- K、椅子を両手で持ち、つかまり立ちした後、片方の手を離し、父の方を見て得意そうな顔をする。何度も繰り返して見せる。
- ・7.23 K、椅子から立ち上がり、食卓に上がろうとした。足を叩かれ、両眼から涙をこぼし、辛そうに泣いた。
- ・7.25 Fが、「外で遊んでくる」と言って玄関へ行く。Kも、一生懸命這って付いて行く。Fが「言ってきまーす」と言うと、Kは手を振る。「バイバイ」が分かっている。
- ・8.2 母→K「カヨコ マンマニ ショーカ？」、K「マー、マンマ。マンマ。」 対話の始めか？
- ・8.3 「マンマー。マンマー。マンマ。」 食べ物を喜ぶとともに、発話自体を喜んでいるようにも思える。「オイデ」もしっかり理解できている。直ぐに来ることもあるが、逆に、おしりを向けて急いで逃げていくこともある。追いかけると、笑いながら、なおも逃げていく。一種の「からかい」か？
- ・8.7 K→母「ンー」と言って物を手渡す。伝い歩きをする。
- ・8.13 下の歯が生え始めている。
- ・8.14 Kが現時点で理解できている語彙—カヨコ、ダッコ、オイデ、マンマ、バイバイ、チョーダイ、ドージ

◇11か月

- ・8.20 「ドージ」（ダージョ）の中間音。くれようとする。両親がKにものを渡す時に、必ずこの声かけ（ドージ）をしていた。姉のFも、「ドージ」の習得は早かった。この「ドージ」は、形式的には語であるが、意味的には文である。「どうぞお受け取り下さい」の意である。
- ・8.23 「マンマ」の発音は、明瞭。父→K「カヨコ、マンマ、タベルカイ？」 K「マンマ、マンマ。」
母の「いないいないばあ」をまねて、K「パーッ、パーッ」。両手を目ではなく、口に持って行く。
- ・8.27 AM7時 K「マンマ。マンマ。」とやかましい。一語だが一文＝一語文。
- ・8.28 父にカード、さじなどを「フーン」といって差し出す。「ドージ」のつもり。父が受け取り、「ありが

とう」と頭をさげてやると、Kも同時に頭を2, 3度縦に振る。その動作が面白い。親がいつもやっていたから、それが習慣化して模倣したのかもしれない。

- ・8.29 K→父「オトターン、ダー、ダー」、大声で父の方を見上げ、抱えてくれと訴えているよう(要求)。父→K「ダッコ カ?」、「ダッコ シチャロー。」と、抱っこすると満足している。
- ・9.1 19時、帰宅した父の姿を見つけて、K→父「アターター」(お父さん)と大きな声で叫ぶ。歯が右下に1本しか生えていないので発音は不明瞭。「オトターン」と言っているように聞こえる。「アチャーチャー」(オカーサン)との区別ははっきりしない。
- ・9.2 K→父「ダー ダー」(どうぞ)、K→父「ア、ダーダー」(はい、どうぞ)。父→K「アリガト」、K→父「ン」(うなずく)、K→父「ダー ダー ダー ダー」(父にカードを渡すまねをして引っ込め、結局渡さない)。この辺りの行動をどう解釈するか?からかい?意地悪している(知恵づいている)と見ることもできるが。
- ・9.3 父と姉Fが洗面していると、Kが風呂場まで急いで這ってきて、自分も洗って欲しいと要求する。これを契機に、朝方は手と顔、食事時には手を洗ってやることにする。右手を洗っていると、こっちもと言わんばかりに左手も出すような仕草をする。
- ・9.7 「いないいないばあ」をする。ふすまにつかまり立ちして、顔を見せてK「バー、バー」。
- ・9.8 「オトティアン」が言葉らしくなってきた。Kは相変わらず早起き。6時過ぎにはもう目覚め、一人でおもちゃを出して遊んでいる。
- ・9.14 Kは自ら立ち上がり、父母の「ジョーズ、ジョーズ、スゴイ」という声に応じて何度も立ち上がる。立った姿が安定してきた。30秒くらいは、じっと立っていることができる。励ませば、何度でもする。
- ・9.17 父が仕事に出かけるので、母とKは玄関先まで出てくる。母→父「イッテラッシャイ、バイバイ」、K→父「バーバイ」(K、片手を振る)、父→K「イッテキマース」、K→父「ンー。バーバイ」(自分も一緒に行きたかったのか。あきらめてまた手を振る。)対話になっている。
- ・同 父が椅子に座っていると、父の足につかまって、K→父「ダッ。ダッ。」(抱っこして)。
- ・9.19 掃除をしている母に、すがりついてきて、K→母「ンネンネンネ。ンネンネ。」(ねんね)眠そうなので、母がおんぶする。
- ・同 KがFに鍋敷きを渡す。K→F「ンー。ドード。」 Fが受け取ると、Kは首と腰を少しかがめる。

◇12か月(満1歳)

- ・9.20 小柄で、6か月から8か月くらいの大きさに見える。6か月のベビー服がまだ合う。食は細いが、食べられるものが増えてきた。特に好物はない。天気の良い日は、外で遊ぶことを好む。暑がり。体重8.5kg。
- ・9.30 朝、母→K「マンマだから、お父さんとこへ行って、手ってあらっておいで」と言うと、父の方へ這っていく。風呂場の戸に捕まり、父→K「カヨコ、テッテ アラオーカ」と言うと、腰をかがめ加減にして、頭ごとなずいている。状況がよく理解できている。
- ・同 22日頃から歩き始める。立ち姿が多くなる。立っている時に、「ヨーイ、ヨイ。」と声をかけると、ふらふらしながら3~4歩ほど歩く。両手を挙げて、バランスを取っている。まだ直立の姿勢は安定していない。
- ・10.7 K→父「テッテ、テッテ」。食事時にKに「さあ、手って洗おうか」と言って、水道の蛇口にKの手を近づけると、このように言う。手を「テッテ」と言うのは、マザリーズ(育児語)で父母が使っている。
- ・同 K→母「ニューニュー」。昼食時、牛乳の入ったコップを指さして言う。「ギュンギュン」とも。まだ発音が未分化で、どのようにも聞き取れる。昨日も牛乳を見て同じように言ったので、Kはそのつもりかもしれない。食べ物に対して好奇心旺盛。歯は、まだ下歯2本だけ。椅子から身を乗り出して食べたいものを指さす。「指さし」表現の出現である。
- ・10.8 Kの立っている姿が目立ってきた。よちよちだが、立ち姿は安定してきている。小走りも可能になってきた。這うのが日増しに少なくなってきた。(ちなみに10日後の10.17のカードには、「ほとんど歩きで、這うことが減多になくなった」と書いている)。
- ・10.9 Fが歯みがきしていると、Kがやって来てやかましい。Kにもコップと歯ブラシをもたせると、喜ぶ。

- ・2.4 15:56 母が外出しようとして、「カヨコ、オンブ、シヨーカ?」、K→母「イヤ」、母→K「カヨコ、オンブ シヨー」、K「イヤ」と振り切って、小走りに逃げようとする。Kは、拒否の時、大声で「イヤ」と叫び、首を横に振り、態度で示す。ここの所、「イヤ」（拒否）発言が目立つように思える。
- ・2月上旬 外でブランコに乗っていて、Fが歌うように「モー イー カイ」と言うと、K→F「モー イー ヨー」。「イー ヨー」、「モー イー ヨー」は、しばしば言う。
- ・2.10 父のコップを指さして、K「トーサン ノ」（お父さんの（コップ））、トーサンの発音はあいまい。「トーチャン」にも。しかし、「ノ」は明瞭で、格助詞が使えていると判断される。品詞の拡張である。
- ・2.11 母が本を片づけていると、Kも本を一冊持ってきて、K→母「ナーイ、ナイ」と言いながら、本棚に入れた。普段、片づけるときに、「ナイナイシヨーネ」（マザリーズ）というのをまねて使ったとみられる。
- ・同 打ったり転んだりすると、K→母「イタッ イタッ」と言いながら母のところに来る。母が何も言わないと、父のところに来て、K→父「イタッ イタッ」を繰り返す。「そうか、よしよし、痛かったの」と撫でてやると満足する。ちなみに4か月前の10.17の同じ状況では、「イタイ」は使えていなかった。この後、頻出。
- ・2.12 食事中、箸を床に落とす。すかさず K→父「アッ」と言って、父の顔を見る。何度も落とし、その都度「アッ」と請求する。わざとやっているようにも見える。父、怒りながら拾う。
同 おやつ時間、KはFにお茶の入ったコップを「ドージョ」と言って渡す。
同 夜、風呂で母とKとの対話。Fは寝ていて、父は食事中。母→K「お姉ちゃんは、何してる?」 K「.....（無言）」 母→K「お姉ちゃんは、ねんねした?」 K→母「ネンネ シタ」 母→K「お父さんは?」 K「.....（無言）」 母→K「お父さん、まんま食べてる?」 K→母「マンマ シタ」 単なる繰り返しではなかった。
- ・2.13 父がトイレに入ると、Kがついてきて、K→父「オトーサン、トータン、（ちょっと間があって）デタ。」 「オトーサン」は、「オタータン」とも聞こえる。
・同 外出するため、Kにフード付きのマントを着せる。K→母「ボーイ イテ」（帽子をかぶせて）。
・同 K、頭を軽くぶつける。K→母「イタイ ヨ、イタイ ヨー。」 打った部分を手で押さえて、何度も繰り返す。ここにきて、「痛い」は、完全にマスターか。
・同 Fが父の布団に入って寝転ぶと、K「ネンネ シタ」。はっきり聞こえる。「シ」は、やや不明瞭。
- ・2.14 KがFの座布団を持っている。Fが「ネーチャンノ」と言うと、K→F「ドージョ」。その後、K→F「ネンネ シタ」（座布団が寝た）。
・同 朝食の残りを食べ終えたらしい。K→母「マンマ、モー イー。モー イー ヨ。マンマ、モー イー。」 椅子から一人で降りようとして、K→F「イタイ ヨ、イタイ ヨー。」 2語文。
- ・2.16 母がベランダに居ると、Kが家の中から叫ぶ。K→母「コボシター。コボシター」見ると、牛乳をこぼしていた。「コ」と「ボ」の間に少しの休止あり。しばらくして、空のコップを振りながら、K→母「ニューニユー、イレテ」。「イレテ」の発音は不明瞭。牛乳を入れてやる。一口飲んで、K→母「モー イー」。椅子から降りて、Fの方へ走っていく。この辺りは、発話・行動が適切に行われている。
・同 Kが父のところに来て、父の前に座る。靴下が脱げかけている足を出して直してくれと言う。K→父「トーサーン、コレ」。「トーサン」はあいまいで、「トータン」とも。「コレ」も「ホレ」とも聞こえる。「これ」が合っていれば（この場合、「ホレ」でも）、指示代名詞「これ」が使えていることになる。
- ・2.18 箸を1本、床に落としてしまった。父にさも取ってくれという顔つきをし、指さして、K→父「コボシタ。コボシタ」。「シ」は、幾分か明瞭性を欠くが、場面から見て確かにこのように言っている。「タ」も「トゥア」([t·al])のように聞こえる。これまでは、牛乳などをこぼした際に正用されていたが、ここでは「落とした」（落ちた）と言うべき場合にも混同して用いられている。あるいは、「落とした」と「こぼした」は未分化なのかもしれない。さらに、床に落とした場合、「こぼした」を代表させて類推で使ったとも考えられる。また、椅子が倒れたのを見て、K→父「ボボシター ボボッター」。最初の音は、「ボ」に聞こえる。こぼれたり（正用）、落としたり（誤用）、倒れたり（誤用）したものに対して、「コボシタ」を使っている。
- ・2.19 K→母「マンマ イユ」お菓子の入ったタッパーを指さして言う。お菓子も「マンマ」である。これも、

未分化か。

同 母が、Kに母の毛糸の帽子をかぶせてやる。Kは、お気に入りの様子。しばらくして、その帽子を持ってきてK→母「ポーシ。ポーシ。」。「ポ」の母音は、[o]と[a]の間[o]、「シ」は母音[i]を伴わない無声音[j]。

◇1歳5か月

・2.20 父が風呂場で手を洗っている。母→K「お父さんに手を洗ってもらいなさい」と言うと、Kはとことこ駈けてきて、K→父「トーサン、テッテ。」。「お父さん」とまず呼びかけ、両手を風呂の入口で差し出し、「テッテ」（手を洗って）と言う。二語文である。

・2.24 Fが、自動車の絵本を見ている。Kは、そばに座ってのぞき込む。K「プー」こうした名詞は珍しい。生活語彙を優先し、一般語彙を意識してこなかったが、こうして自然習得していた。やはり読書は、語彙を拡げていく。

・2.25 K→父「アトー」人に何かしてもらった時、「ありがとう」が身につきだした。Kが缶を持ってきて、父に蓋を開けてくれと言う。父が開けてやると、K→父「アトー」。「アー」の長音部分は促音に聞こえるほど短い。食事の時にも、手ふきを取ってやると、同じように「アトー」と言う。

紙幅の関係で、ここ（「語彙爆発」（Kの場合、次の1歳6か月）の直前）までを本稿の範囲としておく。

ちなみに◇1歳6か月 3.31のカードには、総括的に、

Kは、この3月、急に発言が多くなった。いわゆる「語彙爆発」である。特に要求が言葉でできるようになってきた。「～して」が目立つのはその反映である。イエス、ノーの肯定・否定はこれまでもほぼできていたが、それがはっきりしてきた。「いる」、「いらん」、「いや」などは、強い調子で発言する。思考力の上でも、表現力の上でも、Kの場合、この1歳6か月は大きな転機となっているようである。ほとんど生活の用が足りている。そう言えば、「うんち」も教えるようになったし、マンマ、ネンネ……、基本的な生活語彙（この時期としての基本語彙）は十分に獲得・習得している。

と記している。この1歳6か月及びその後の言葉の状況については、別稿を用意しなければならない。

Ⅲ 分析と考察

以上、生後から1カ年半におけるK児の発声・発話の実態から、言語表現の発達について見ておきたい。

（1）言葉の習得は、まずは音声から言葉へ その音声も単音から音節へ その単音も母音から子音へ

○「クーイング」：生後41日目（1981.10.30）「シー」、「アー」「ウー」。母音のみ。カードが、ここからスタートしているので不明だが、実際にはもっと早いかもしれない。

○「喃語」：6か月（1982.3.7）「バツ」、「バー」など。子音+母音。これも、もっと早いかもしれない。

○「重複喃語」：7か月（4.22）「バー バー」「ンバー、ンバー、ウンバー」。同じ音を繰り返して発声している。

○返事：9か月（6.28）「カヨチャン」と呼びかけると、「アー」、「ウー」と声を上げる。

○イントネーション・リズム：9か月（7.1）言葉習得の前に、まずはイントネーション・リズムを習得するのではないか。音声状況から、「ウマ、ウマ」「オカーサン」、「オトーサン」と言っているように聞こえる。

○「初語」：9か月（7.17）「マンマ ダヨ」と声をかけると、「マンマ」と明瞭に発音できている。初語として認定できる。

○「対話」：10か月（8.2）「マンマニ ショーカ？」→「マー、マンマ。マンマ。」対話が成立している。

○「理解語彙」：10か月（8.14）カヨコ、オトーサン、オカアサン、オネーチャン、マンマ、ダッコ、オイデ、バイバイ、チョーダイ、オスワリなど、理解できる言葉は全て生活語彙、そしていずれも基本語彙である。

○「一語文」：10か月（8.7）「シー」、11か月（8.20）「ドーズ」、（8.28）「フーン」と言ってさじなどをくれようとする。形態的には「語」であるが、機能的には「文」と言って良いのではないか。その意味で、乳幼児にとって語は全て文なのかもしれない。別言すれば、初語の時点から文が始まっているという見方もできよう。

○「二語文」：11か月（8.29）「オトーターン、ダー、ダー」、「お父さん」の呼びかけと、「抱っこして」とで二

語文として認定できる。一語文と二語文とは、習得の時期が比較的に近接しているか？

以上のように、K の場合も、[音声（クーイング・喃語・ジャーゴン）→語（初語）⇒文（一語文・二語文）→この後に展開する語彙爆発]という言語習得の大きな流れ（発達的一般性）を見事に実現・反映している。

（2）音声は、単音（母音から子音へ）から、そして音節へ

最初の音声は、口を開いて呼吸を出せば（さらに声帯を振るわせれば）発せられる母音から。その具体は、必ずしも「アイウエオ」ではない。5 つに限られないし、似ているものもあり、似ていないものもある。これが長い間の経験、及び「学習」によって次第に日本語の5母音に整理されていく。しかも、その定着はかなり長期の期間（就学後までも）を必要とする。

次いで「子音」も、口を閉じて直ちに離して発する唇音[m][b][p]が発音しやすい。その意味でも、初語の多くが「マンマ」であったり「ママ」であったりするのとは当然のことと思われる。ただ母音にしても子音にしても、幼児音の域を抜けるにはかなりの期間が必要となる。発音上、脱落・省略・曖昧は頻繁現象である。

さらに音節に関しては、母音だけのア行はまあまであるが、カ行は[k]音が難しく、サ行も[s]音でなく[j]音、タ行も[tj]音になりがちで……、総じて曖昧・不安定である。その意味では、発達途上、学びの進行中、第一コーナーの始まりといった様相である。

（3）乳幼児発話は語＝文

上でも述べたが、乳幼児の場合、語＝文、つまり一語＝一語文、二語＝二語文と認定して良いと思われる。「ドーズ」は「受け取って」だし、「テッテ」は「手を洗って」であり、「ダッコ」は「ダッコして」であり、「ツッター」は「靴下をはかせて」であり、「ニューニュー」は「牛乳を入れて」である。また、「オトサン」・「オカーサン」の呼びかけにしても、「オトサン見て」・「オカーサン来て」であったりする。「これは何？」と質問すれば語で答えるかもしれないが、自ら話しかける場合は、ほとんどが語＝文と見て良からう。

（4）まずは独話、そして対話へ

言葉の最初は、純粹に声をあげる独り言、一人語りから始まっているように思われる。そのうち声をかけられることを楽しみ、自ら声をかけ、その反応があることで充たされていくのではないか。独り言・独話から対話への大きなきっかけとなるのは返事か。返事してもらい、自ら返事することから始まるように思われる。

それと、挨拶の呼応も機縁となり得ていると思われる。「行ってらっしゃい・行ってきます（バイバイ）」、「いただきます・どうぞ」、「ごちそうさまでした・でちた、はい」、「もんちゃんは・ねんね」など、これまたまさに「返事」（返りごと）である。こうして対話を経験し、対話を楽しみ、対話を喜ぶ環境が形成されていく。そして、この経験・環境が、次第に幼児を「おしゃべり」にしていく。

（5）文法・表現法

この時期に特徴的な表現法としては、呼びかけ（オトサン・オカーサン）、返事（ウン）、挨拶（バイバイ、（ごちそうさま）デ・チ・タ）、要求（○○シテ）、拒否（イヤ、モーイー）、容認（ウン）などである。

品詞的には、名詞→感動詞→動詞→副詞→形容詞→助詞などが、ほぼこの順序で確認された。

以上、本稿では、筆者の次女 K が、生まれてから1年5か月までの期間、「クーイング→喃語→ジャーゴン→初語→一語文→二語文」の順で言葉を習得していく過程について実証的に取り上げてきた。一般性と個別性の両様を認めることができた。なお、「語彙爆発」と呼ばれる1年6か月以降は、別稿に譲ることとする。

参考文献

- 1) 赤羽根有里子他編 (2018) 『保育内容ことば』, みらい
- 2) 大久保愛 (1967), 幼児言語の発達, 東京堂出版
- 3) 野地潤家 (1973), 幼児期の言語生活の実態, 文化評論出版
- 4) 藤原与一 (1977), 幼児の言語表現能力の発達, 文化評論出版

Development of Linguistic Expressions in Early Childhood

Hirohisa YOSHIDA (Yasuda Women's University)

Abstract

How do people acquire words that are means of recognition, thinking, and communication? Up to now, there have been many cases and studies reported by collecting utterances of infants. It is an example to take up here. It is a reality of the development of the word of one and a half years from birth until the person comes to utter the word (Japanese).

It is a document of the process of meeting words, understanding words, imitating words, expressing words from beings who do not have words - growing up as a word user.

Keywords: Early childhood, Infant language, Linguistic expression, First language, One-word sentence